

令和3年度

芸術文化学部 芸術文化学科
(募集区分b)

特別選抜

学校推薦型選抜I 帰国生徒選抜 社会人選抜

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題は、全部で6ページ、解答用紙は1枚、下書用紙は1枚である。試験開始の合図があつてから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れなどがあつた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 試験開始後に、解答用紙の指定欄に受験番号を算用数字で記入すること。
氏名を書いてはいけない。
- 4 解答は、すべて解答用紙に記入すること。
- 5 配付された問題冊子および下書用紙は、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
2.11.25
富山大学

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

ある町の青年会議所が、「私たちはこんな町に住みたい」という題で募集した小中学生・高校生の作文集のなかに、こういう一節があった。

わたしたち子どもで一つだけこまることがあるんだ。それは雨の日に外で遊べないことなんだ。みんな遊べないと、むしゃくしゃするから、仲間われしたり、いじわるをしたりするんだ。だから雨の日でも遊べる家、のような遊び場をつくるんだ。（傍点筆者）

むかしは雨の日でも、子どもたちは軒下で、めんこをしたり、ままごとをしたりしたものだ。しかしそういうふかい軒のある家も、いまでは少なくなってしまった。

私の家では、職業がら、よく学生たちが大挙しておしかけてくることがあるのだが、家には入りきれないので、ときどき庭でバーベキューをすることがある。庭で食事をするというのは気分のいいものだし、またバーベキューだと手間がかからないうえ、比較的やすあがりにつくので、よくそういうことになるのだが、しかしそのためには、前日から、たえず空もようを気にしていなければならぬ。

日本では、四季を通じて、雨はいつふってくるかわからないので、なにごとにつけ戸外での催しものには、雨のことに気をつけておかなければならない。私たちはかくべつふしぎにはおもっていないなくても、こんなに気まぐ

れなお天気をもっている国は、世界でもめずらしいのではないか。ほかの国では、雨季だとか、スコールだとかいうように、雨のふるときがかがりられているのがふつうだ。ところが日本ではそうはいかない。そこでむかしから、戸外の催しものは、雨がふつたら「雨天順延」とだいたい相場がきまっていた。戦争でさえも、しばしば「雨天順延」されたものだ。織田信長が嵐をついて桶狭間に今川義元をやぶつたのは、その常識の逆手をとった勝利であつたといえる。しかし生活が高度に組織化されてきた今日の社会では、「雨天順延」がだんだんきかなくなつてきている。ぬれねずみになりながら遠足にでかけたり、パンくい競争をしたりする図を、そここでよくみかける。

日本がそういう雨の国なら、「雨の日のための建築」をもつとかんがえてみてもよさそうにおもえるが、どうだろうか。雨のふらない地中海に立地したギリシャ民族が、戸外の広場を発明したように、雨の国の日本では、広場とはちがつた「戸外の生活空間」を、もつと発達させてもいいはずだ。雨がふると、心のなかまでうつつとしくなる、というのではなしに、雨もまたたのしい、というような都市や住宅の空間の構造をかんがえても、ちつともおかしくはないだろう。

お天気の日の催しもののときには、主催者がきまつて「きょうは絶好のお天気にめぐまれて……」というあいさつからきりだすのがつねとなつているが、がんらい、日本は雨の恵みによつて発達してきた国ではないか。逆のあいさつがあつてもいいようにおもわれる。私が経験した知人の結婚式のなかで、雨の日に小さなお寺でおこ

なわれたときほど、しつとりとした情緒をたたえたものはなかった。それは新しい人生の門出にふさわしい、しずけさとおちつきにめぐまれていて、いまもふかく印象にのこっている。

春の野に 董採みにと来し吾ぞ 野をなつかしみ 一夜宿にける (万葉集一四二四)

と古歌もいうように、日本人は、もともと戶外生活の民族であつた。それは、この国の主要な生産基盤を、稲作をはじめとする、ひろい農業においていたことと関係している。

日本人が戶外生活の民であつたことを証するものは、ひとつは、戶外におけるさまざまな道具類の発達である。一年中、野山ですごす農民は、雨装束として笠や蓑などを発達させ、また町の人びとは、大きな傘や各種の下駄、家いえからのふかい軒のつきだしや犬走り(注1)などをつくりだした。さらに戶外生活の臨時の床として、ござ、むしろ、緋毛氈(注2)、縁台(注3)、川床(これはいまでも京都の鴨川や貴船にみられる)(注4)、ばったり床几(壁にしまいこまれるベンチ、京都に多い)、そのほか、まん幕(注5)、重箱、角樽(手さげの樽)、提灯、屋台、屋形船等々、戶外生活をいろどる多くの道具や施設類がもちいられたのである。

第二に、これにたいして、室内生活のほうは、比較的簡素なものであつた。庶民にとつても家というものは、ながらくのあいだ、雨露をしのげればたりるもの、というぐらいにしか、かんがえられていなかったのである。したがって日本の住居は、庭すなわち戶外にむかつて、きわめて開放的にひらかれており、庭も家のうちとみなされ、あるいは逆に、家のほうが戶外生活の延長か、またはそのひとときの宿りぐらいにしか、みられていなか

ったふしもあるくらいだ。

そういう戸外生活主義が、だんだん室内生活重視のほうへかたむいていったのは、一般的にいえば、江戸時代の町家社会からで、町家の奥座敷や、芝居小屋、遊里（注6）などにおいて、数寄（注7）や遊興の生活がくりひろげられるようになったことが大きい。しかし一方、戸外生活へのあこがれが、鄙（ひな）の陋屋（ろうかく）（注8）を範とする茶室建築をうみだし、野点（のだて）の茶会へと人びとをかりたてたのである。それが、現在のように決定的に「室内生活」主義にかわったのは、一口にいつて西欧建築文明の影響による。とくに第二次大戦後に、都市への人口集中がすすみ、鉄筋コンクリートのアパートが大量に建設されて、そのマイホームのなかに、おとなも子どもも、とじこめられるようになったことが、つよく影響している。むかしは、家のまえの道が、子どもの遊び場であり、おとなの社交のひろばでもあったけれど、自動車の増加が、そういう戸外の生活をだんだん危険なものにできてくる。

（上田篤『日本人とすまい』より）

- 注1 犬走り 建物の外壁面を保護するために、細長く犬一匹通れる程度の幅で地盤を突き固めて作った場所。
- 注2 緋毛氈 茶道の茶席やひなまつりのひなかざ雛飾りで用いる、緋（赤）色に染めたフェルト生地。
- 注3 縁台 茶店の店先や庭に置いて夕涼みなどに用いる木や竹などでつくった細長い腰掛け。
- 注4 川床 京都北部の貴船などでは、納涼のためせせらぎのすぐ上に架けた仮設の床。
- 注5 まん幕 式場・会場や昔の軍陣などで張りめぐらす幕。
- 注6 遊里 一定の区画を仕切って遊女屋をあつめてある町の一画。
- 注7 数寄 風流・風雅に心を寄せること、特に茶の湯などを好むこと。
- 注8 鄙の陋屋 都会を離れた土地にある狭くてみすぼらしい家。

問一

日本人はこれまでどのような道具や施設を作って雨の日に対処してきたかを本文に沿ってまとめ、さらに筆者が述べるような現代の「雨の日のための建築」ではどのような過ごし方ができると読み取れるのか、四百字程度で答えなさい。

問二

筆者は「西洋建築文明」が日本の生活空間に影響を与え、変化をもたらしたと考えている。これに関する筆者の考えをまとめたのち、あなたはそれに対しどのように考えるか、四百字程度で述べなさい。

(特別選抜/学校推薦型選抜I 帰国生徒選抜 社会人選抜)

科目 小論文

解答用紙

総点	
----	--

受験番号									
------	--	--	--	--	--	--	--	--	--

問一

10

20

30

450 300 150

100

500

問二

10

20

30

450 300 150

100

500

見本

下書用紙